

東千歳基地 市街地訓練場の視察レポート

吉岡 俊介（北海道平和委員会青年協議会）

実施日時：2009年1月29日14:30～16:00

実施場所：陸上自衛隊第7師団（東千歳）市街地訓練所

参加者：紙智子（日本共産党参院議員）を団長とする日本共産党国会議員調査団に、北海道平和委員会、平和婦人会、安保破棄北海道実行委員会が同行。総勢15名

目的：陸上自衛隊が各方面隊に設置した市街地訓練所（都市型戦闘訓練施設）の実態をつかみ、どのような目的と内容で訓練が行われているのか、海外での戦闘訓練を目的としているのではないかと、米軍との一体化の中で共同使用が行われていないか、などを明らかにする。

●現地到着

第7師団の正門の外側にマイクロバスが1台用意されており、全員が乗車しての移動となった。運転手1名、助手席に1名と、案内の鈴木1尉の3名の自衛官が同乗した。車内では「管理棟内では情報漏えいを防ぐ目的で、民間人であれ自衛官であれ、映像・音声の記録をできる電子機器は一切持ち込みできない」と話され、管理棟以外では自由に撮影等を行ってもよいとのことであった。

正門から駐屯地内を通り、「東門」を抜けて演習場エリアに入り、5～10分ほどで「東千歳 市街地訓練場」に到着。管理棟へと案内された。



●管理棟にてブリーフィング

管理棟の入口で携帯電話、カメラなどを「持込禁止機器一時保管箱」に入れ、最後に鍵をかけて橘氏が鍵を預かり入室。丸山2佐から市街地訓練場の概要について説明があり、質疑応答を行った。

【1】2007年（平成19年）8月から使用開始。9・11テロ事件があり、防衛庁から防衛省になってから近接戦闘の位置づけが高まり、ゲリラや特殊部隊による攻撃への対処を目的とした訓練施設であると説明。

これまでに約6千名の隊員が訓練に参加。施設は第7師団だけではなく北部方面隊の普通・機甲・特科などすべての戦闘部隊が使用する。「市街地訓練はあらゆる戦闘部隊の共通する訓練」と話される。各駐屯地においてコンパネで仕切った簡易な施設を用いた各個訓練（基礎訓練）を行い、東千歳市街地訓練場では組織訓練を行っている。



訓練場の用途は部隊ごとの訓練目的・任務次第として、訓練の詳細については回答がなかった

が、侵入したゲリラや特殊部隊の搜索や制圧などの訓練を行い、ヘリコプターからロープで屋上に降下しての「ヘリボーン」や90式戦車などの車両を配置しての訓練なども行っている。



また、実弾・実爆（火薬）の使用はなく、レーザー光線銃とヒットインジゲーター（レーザー受信装置付きジャケット）のハイテク機材を用いるなどしている。レーザー光線銃は被弾の場所によって死亡・重傷・軽傷と区分され、管理棟のモニターに表示される。

訓練規模は1個中隊以下で行い、現在のところ棟数（11棟建など）を増やすなどの拡張の計画や要望はない。

他方面隊の使用は現在までにはなく、消防・警察との防災訓練は行っているとのことであった。警察との共同使用は治安出動の連携強化のためと考えられる。

米軍との共同使用はこれまでは実績がなく、今後の使用は上級（北部方面総監部）の調整によるものであるとの回答で、米軍との共同使用を否定しなかった。日米共同冬期訓練「ノース・ウインド09」での使用についても上級で調整すると答えた。

質疑応答での「当訓練施設は海外での市街地戦闘を想定したものではないのか」という問いに対しては、「国際協力活動とは関連がない」「防衛の一環としての訓練」「防衛の大綱には外部からの侵略の可能性は『なくなった』のではなく『低くなった』という認識」「攻めてくる敵がいるかいないかということについては、攻める側が決めることであって我々が決めることではない」などと答えた。



また、どのような教範で訓練を行っているのかということについては、「市街地戦闘の教範は古くからあった。昨年（正確には答えられなかったが）だったかに新しいものができた。」と答えた。

- 【2】訓練施設は、情報をモニタリング・集積する管理棟1階建て1棟、鉄骨造3階建てマンション（マンション東千歳・3DK各階4部屋）1棟、鉄骨造2階建てスーパーマーケット



マーケット東千歳・レジカウンターと陳列スペース）1棟、鉄骨造2階建て銀行（BANK・1階にロビーと金庫室、2階に9部屋の事務室）1棟、鉄骨造1階建て民家（4LDK）1棟の「4棟プラス管理棟」で構成され、片側2車線程の広さのメイン道路、公園があり、マンション前・スーパー前・銀行前を結ぶ「L字」の地下道が造られている。また、マンション前の階段を降りたところからマンホールへとつながる丸い穴が造られていた。

その合計延べ床面積は、約3500平方メートルであり、バス停や宝くじ売り場などを模した建物や、建物に侵入する際の遮蔽物となるような施設もある。

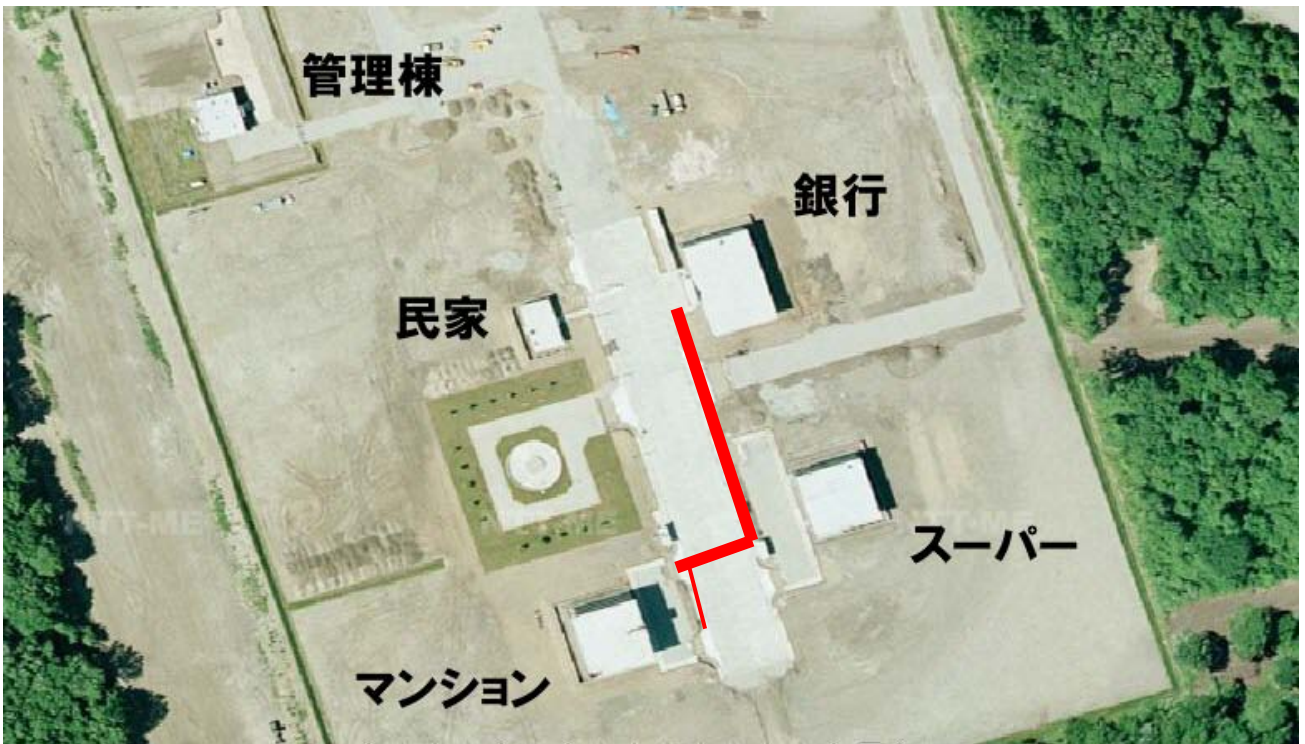
建物本体は鉄筋コンクリート作りであるが、ドアや窓はコンパネで壊れても取替えが出来るように出来ている。訓練でドアを蹴破って突入することもある。また、民家の塀や建物内の家具を模した工作物は砲弾の空き箱などの廃材を利用して作っているという。（予算が少ないからだと説明）

平屋の民家には冷蔵庫、電子レンジ、洗濯機、応接セットなどが配置されていた。





【北海道大演習場 東千歳地区の航空写真：ネガポジ反転】



【航空写真拡大図】

【3】感想

演習場内の原野をバスで走った先に見えた市街地訓練場はとても異様に見えた。緑の木々に囲まれた中にコンクリートで街並みの一面を切り取って貼り付けたような「コンバットタウン」はまさに近距離で人を殺す戦闘訓練の場所だと感じた。

ブリーフィングでの質疑応答では「米軍の使用」は「上級の調整による」とだけ答えていたが、明確な否定をしなかったことと、①自衛隊がアメリカに渡って技術指導を受ける共同訓練、②在日米軍基地を使用しての共同訓練、③自衛隊の市街地訓練所での共同訓練が相次いで行われ、米軍からの指導を受けている実態が明らかになっていることから、東千歳においても米軍から直接指導を受ける形での訓練が必ず行われると思われる。また、あいば野演習場での日米共同市街戦訓練（2006年）ではイラク・アフガンを想定してか敵役の頭に布を巻くということを行っていたことから、日本防衛のための訓練でないということは明白かと思う。

丸山2佐が「敵を倒す訓練もしているのか」と問われ、非常に答えにくそうであり、自らの「制圧する」という言葉も言い直したいが言葉が見当たらないという場面があり、そこに「人殺しの訓練である」という隠したい実態があるのだろうと感じた。

《ウィキペディアより抜粋》

【自衛隊でのCQB訓練】

自衛隊は、もともと大規模な侵略行為に対しての対処をしてきた。しかし、冷戦崩壊や、アメリカ同時多発テロ事件などの世界情勢の変化によって、特に陸上自衛隊は大規模な侵略行為だけでなく、テロリストやゲリラが市街地などに侵入した際の対策を強化している。

2001年12月に発生した北朝鮮の工作船事件などから、このような船で特殊部隊や作業員が上陸する可能性への警戒が強まった。

事実上の空白地帯だった九州南西部の防衛を担う西部方面普通科連隊が創設されたのをきっかけに、他の全国の陸上自衛隊の部隊でも対ゲリラ・特殊部隊（ゲリラ・コマンド＝ゲリコマ）や対テロリスト対策のための試みが行われている。近年は各地の駐屯地祭などでも市街地での戦闘などが訓練展示として行われており、89式小銃型の電動エアガンを使用した近接戦闘訓練も一部の部隊で実施されている。

訓練中の自衛隊隊員陸上自衛隊だけではなく、航空自衛隊の基地防衛を任務とする基地警備隊も市街地戦闘を重視した訓練をおこなっている。基地防衛教導隊がその中心である。海上自衛隊や海上保安庁でも船舶の臨検などにおいて、こうした近接戦闘訓練をおこなっているとされる。

[市街地訓練場]

近年、陸上自衛隊では市街地戦闘訓練の需要が高まっている。今まで各部隊では宿営地等にある廃屋（例：北九州、曽根訓練場では旧陸軍の毒ガス製造工場を使用していた）や、隊舎などの一部を使用していたり、また、ベニヤ板などで部屋などを想定したものを使用しているが、より専門的な訓練場の必要性が指摘され、各方面隊で1ヶ所ずつ市街地戦闘訓練を行う為の「市街地訓練場」と呼ばれる施設を整備している。

東部方面隊には富士駐屯地（富士学校）近傍の東富士演習場内に「市街地訓練場」が2006年3月に完成しており、訓練が実施されている。約3万平方メートル（縦約150メートル、横約200メートル）の市街地訓練場内には総工費約25億円をかけて官公庁舎・テレビ局・学校・銀行・テナントビル・ホテル・マンション・アパート・レストラン・スーパーを模した鉄筋コンクリート造りの施設計10棟と管理棟を合わせた計11棟が建ち、地下鉄などを想定した地下道とヘリポートも設けられており、本格的に都市が再現されている。建物の屋上や屋内には可動式のテレビカメラが設置されており、管理棟のモニターで1度に40力所の訓練状況を確認できる。夜間の使用も可能なこの国内最大規模の市街地訓練場が出来た事で全国で唯一、中隊規模（約150人）での市街地戦闘訓練が行える様になった。

北部方面隊は北海道大演習場、東部方面隊は王城寺原演習場、中部方面隊はあいば野演習場、西部方面隊は霧島演習場に同様の市街地訓練場が整備される、これらは小規模なもので、建物は4～5棟の小隊規模を対象とした訓練場となっている。2007年5月の時点では北海道大演習場以外の4ヶ所が完成している。

[近接戦闘とそれに関する訓練]

近接戦闘訓練に関しては、各普通科に”ウオッティー”と呼ばれる市街地・近接戦闘訓練隊と呼ばれる小編成が存在する。名称は各普通科部隊で違う場合もあるが銃剣道訓練隊と同じ規模であり、編成隊は駐屯地の屋上や屋内を使用して市販のエアガンなどを個人で購入して訓練を行っている。

編成隊は連隊長の決で私物装備を購入する事ができ、課業中に装備品を買う事も許されている。専用の訓練場が無い部隊などでは民間のサバイバルゲームフィールドで近接戦闘訓練を行ったり、音響効果のみの民間訓練用スタングレネードを購入して訓練を行っているところもある。一部の部隊では海外製スタングレネードを演習場で使用しているとされるが、統一されておらず毎回納入される製品が違う場合もある。